

イスラエル考古学との出会い

桑原 久男

はじめに

イスラエル考古学という場合、それが意味する内容は、現代国家としてのイスラエルがその領域とする土地を対象とする考古学ということになるだろう。この土地に対しては、イスラエルの他に、聖地 (Holly Land)、聖書の土地、レバント、パレスチナ (シリア・パレスチナ)、カナーンなど、違った立場からのさまざまな呼び方があるが、その用いられ方は定まっているとはいえず、それぞれの用語が指示示す地理的範囲についても統一的な意見はないのが実状である。考古学においても、それぞれの立場から、聖書考古学、シリア・パレスチナ考古学などとして、名称の異なる枠組みから取り組まれてきた。このようなイスラエル考古学の成果は膨大であり、ひとつひとつの成果をとりあげる余裕と力量が筆者にはない。ここではそれに代えて、筆者自身のイスラエル調査の体験もまじえながら、概説書・論文その他の著作を通して垣間見る近年の学問的動向の一端をスケッチ風に記述することで、イスラエル考古学の現在に触れてみようと思う。

現代考古学の展開

B. トリガーの名著『考古学思想史』(Trigger 1989: 183-184) では、近代考古学すなわち文化史考古学の展開のひとつとして、イスラエル考古学は、日本考古学と並んでナショナルな考古学というレッテルが貼られている。新しくこの地に来到した人々とその遠い過去とのつながりを確認する手段として考古学が重要な役割を果たし、聖書の伝統についての確かなアリティーの感覚を人々に提供するというのである。田中琢氏も、いま世界で最も考古学の盛んな国はどこかと問われれば、躊躇せずにそのひとつにイスラエルをあげるとして、この国では考古学がナショナル＝スポーツだという人があるくらいだと述べている (田中 1993)。ただし、政治情勢とも関連して、イスラエルの考古学をめぐる社会的状況には現在、かなりの変化が現れている (Elon 1997; Syabit 1997)。イスラエル社会の内側では、第一世代に比べると世俗的かつリベラルなポスト・シオニズム世代の人々が中心を占めるようになって、考古学はかつてのようにもはや人気のあるスポーツではなく、考古学離れが進んでいるという。これは、後で述べるように、考古学自体の学問的なあり方が大きく変化したこととも関連

するのであろう。一方、中東和平の進展に伴ってパレスチナ人の考古学 (Palestinian Archaeology) がその姿を現してくれるなど、この地の遺跡とその管轄や研究の問題に関しては今後の行方が注視される。

イスラエルの考古学は、グローバル化の進行に伴って世界を覆いつつある現代考古学の潮流に呼応して、この20年ほどの間に急速にその姿を変えようとしている。80年代半ば頃までは、聖書考古学に対する「ニューアーケオロジー」の影響は部分的に止まっていることがしばしば指摘されていたものの、その後、とくに90年代に入ってからの動きは急で、プロセス考古学とポストプロセス考古学の大きな波が一斉に押し寄せて、伝統的な聖書考古学や聖書研究の立場に立つ研究者をうねりの中に飲み込んだだけでなく、聖書の記述の歴史性やイデオロギーへの向き合い方（それ自体は新しい問題ではないが）をめぐって、その余波がさまざまな立場の一般市民をも巻き込もうとしている（たとえば後述の聖書考古学会のHP参照）。

1990年にエルサレムで開催された第二回聖書考古学国際シンポジウムに参加した牧野久実氏は、世界中から著名な考古学者が集まったこの学会の熱気に触れながら、聖書考古学が、聖書の記述を証明するという従来の視点ばかりでなく、社会学、人類学、地理学といった他の分野との学際的研究の可能性を探りつつ、新しい考古学的手法を視野に入れて、聖書考古学のあり方そのものを考察の対象とするなるなど、もはや聖書考古学という名では語りつくせない幅広い領域をその研究対象とするようになった事実を紹介している (牧野 1994)。このシンポジウムの内容はのちに論文集として公刊され、活字を通して、聖書考古学がいよいよ変貌しつつあるその当時の雰囲気に触れることが可能となっている (Biran and Aviram 1993)。

アリゾナ州立大学の W. ディーバーは、ゲゼルの調査に携わりながら、かねてより、聖書考古学という枠組み、ニューアーケオロジーの展開に沿った独立した分野としての「シリア・パレスチナ考古学」という枠組みとを対比させつつ、この土地における考古学の理論的側面について検討をおこなってきたが (Dever 1985)、近年は、両方の枠組み間の対話をはかるべく新たな提言をおこなっている (Dever 1992)。このシンポジウムの記録集に寄せた論考でも、ディーバーは、イスラエルの考古学では、1970年代

後半には族長時代を証明するとされた考古学事実は時代遅れとなり、1980年代には、旧約聖書が物語るようなイスラエル人によるカナーンの軍事征服ではなく、初期イスラエル人の多くは在地のカナーン人に由来するという理解まで生み出されるようになり、最近ではソロモンの統一王国時代についての考古学的事実にすら疑義がもたれるようになっている事実などをまず指摘する。そして、聖書の物語、とくに族長と征服の時代についての史実を証明するのが目的であったオルブライト流の聖書考古学を改めて否定するのであるが、それでは聖書考古学の死亡を宣告してニュー・アーケオロジーの勝利を宣言するのかと思いきや、そうではなく、逆にI. ホッダが主唱した「コンテクスト考古学」の概念・哲学を持ち込んで、イスラエル人のカナーン定着という問題を例にあげながら、旧約聖書のテキストを歴史としてではなくイデオロギーの産物として批判的に読むことを通じての「新しいスタイルの聖書考古学」を構築するという可能性を求めている(Dever 1993)。

現時点においてこうした路線のひとつの到達点ともいえる重要な著作が、T. レヴィの編集による『聖地の社会の考古学』(Levy 1995)である。この通史的論文集は、アーチ学派の歴史学を全体の下敷きとして、文化システム、文化生態学、古環境学など、幅広い領域を研究の視野に取り込んでいることが特徴で、もはや旧来の聖書考古学の枠組みには収まらないどころか、理論、概念、方法論、あるいは哲学も含めて、まったく完全なプロセス考古学の作品として仕上がっている。銅石器時代の社会に首長制の概念を適用するなど、社会進化論の枠組みが採用され、セトルメント・ヒエラルキー、ランク・サイズ分析などのさまざまな手法が操られている。青銅器時代から鉄器時代Ⅰにかけての中央丘陵地帯への初期イスラエル人「定着」の問題について、物質文化と民族とを直接リンクするのではなく、環境や生業といった観点から新しい解釈を示していたフィンケルシュタイン(Finkelstein 1988)が、おなじ問題について再論をおこなっているほか、ひとつひとつの論文が興味深いが、その概要を紹介する余裕が残念ながらここではない。この論文集の第二版に序文を寄せたK. フラナリーは、かつて旧約聖書とニュー・アーケオロジーが相まみえることはないだろうと思っていたが、誤りであったことがこの論文集によってはっきりしたとして、執筆者のほとんど全員が理論倒れの哲学者ではなく、現場の経験豊かな実践的フィールド考古学者であることを高く評価しながら、品質の高い経験的なデータと文献の操作活用とが結びついたとき、ニュー・アーケオロジー、すなわち説明的、プロセス的、進化論的な考古学がいかにうまく働くかがよくわかつたと、最大級の賛辞を惜しまない(Flannery 1997)。

イスラエル考古学のプロセス考古学への傾斜ぶりが見事

に現れているこの論文集に対して、N. シルバーマンとスマールの編集による『イスラエルの考古学 一過去の再構築と現在の解釈』(Silberman and Smal 1997)は、そのタイトルが示しているように、ポストプロセス考古学の視点を強く含みながら、イスラエルの考古学や歴史をめぐる諸問題についてアプローチを試みている。このほか、90年代に出版された新しい総合的著作としては、ヘブライ大学のベン・トルが編集した『古代イスラエルの考古学』(Ben-Tor 1992)と、同じくヘブライ大学のA. マザールによる『聖書の土地の考古学』(Mazar 1990)があげられる。一般向けの入門書としては、R. ハリスの『聖書の土地の世界を探る』(Harris 1995)が好著である。いずれも、在來の聖書考古学の枠組みの路線に収まっているが、近年の新しい発見と研究の蓄積を総合しつつ、かつ聖書の記述の歴史性と批判的に向き合って古代イスラエルの歴史の再構成を試みている。聖書考古学の到達点を示すこうした著作が示すように、研究者の多くは、世界考古学の潮流にも呼応しながら、現在、聖書に対してはリベラルなミニマリスト(聖書の歴史性を最小限に評価する)の立場をとっている。しかし、考古学に関しては、聖書に対する関心からの動機づけやアプローチ自体は現在もやはり間違いなく続いている。イスラエルの考古学に携わる研究者の多くは聖書学研究の背景を持っていて、考古学的な発見を歴史や聖書との関わりという観点から解釈する傾向にある。聖書重視のこの傾向は考古学的解釈の客觀性に影を投げかけ、原理主義的なアプローチもまた影響力をもっているという(Mazar 1990: 31)。

イスラエル考古学と日本人の出会い

遠く離れたイスラエルの考古学と日本の考古学は、その展開の過程において接点をもっていた。日本にヨーロッパ流の近代考古学の方法を移植して日本考古学の礎を築いた浜田耕作氏が、パレスチナ考古学にも大きな足跡を記したフリンダース・ペトリーの方法に大きな影響を受け、また、浜田氏の後を継いで京都大学教授となった梅原末治氏はヨーロッパ留学時代にペトリーが指揮するテル・ジェメーの発掘現場を訪ねたことがある。金闇恕氏が研究史の一齣として重視するこれらのエピソードは、イスラエル考古学と日本考古学の双方が、ペトリーを直接・間接の起点として、層位学や型式学を基礎とする近代考古学として出発した時代の情景を今のわれわれに彷彿とさせてくれる(金闇 1985, 1997)。

その後、別々の道を歩むことになったイスラエル考古学と日本の考古学が再び会うことになったのは、考古学・宗教史学の研究者から成る日本隊によるテル・ゼロール発掘調査のプロジェクト(1964-66, 74年、団長: 大畠 清)

を通してであった (Ohata 1964-66; 小川 1980, 1989; 金閥 1997など参照)。ハツオールなどの大規模な調査を通して築かれたシステムティックな発掘調査技術や調査組織の方法などが、その後、日本の考古学に持ち込まれて、70年代の高度成長期における初期の行政調査の体制を形作るのに寄与をした事実は関係者に広く知られるところである (金閥 1997, 1999)。それはともかく、現在のわれわれが携わっているエン・ゲヴ遺跡のプロジェクト (1990-92, 98-99年、第一期団長: 金閥 恕; 第二期団長: 月本昭男) は、年月を経て、このテル・ゼロールの調査組織とイスラエルの研究者との交流が継続した結果として導かれてきたものである。エン・ゲヴ遺跡の発掘調査そのものは、イスラエル考古学内部における地域研究、学際的・国際的調査研究の要請という情勢などを受けて展開したより大きなプロジェクトの一環であり、日本隊が参画して一翼を担うことには至った具体的な経緯や日本側にとっての意義等については小川英雄氏を始めとする関係者による詳細な説明があり (小川 1989, 1992; 金閥 1990, 1999など)、具体的な成果の一部はすでにいろいろな形で紹介されている (金閥 1992; 小川 1993; 日野 1994; 小川・山本 1997; 牧野 1995, 1997; Sugimoto 1999; 置田・日野 1999; 山内 2000など)。

プロジェクト全体を統括したテル・アヴィブ大学のM. コハヴィ氏は、聖書考古学の現状と今後の方向性を展望する中で、その「ゲシュールの地プロジェクト」について、目的と方法・意義を述べている (Kochavi 1993)。1986年に始まったそのプロジェクトの目的は、従来ほとんどその内容が知られていないガリラヤ湖東岸、ゴラン南部地域の青銅器時代、鉄器時代の文化について、徹底した地域調査によって再構築することであったが、同時に、幅広い方法を用いてデータを収集することで、地域の環境と人間活動との関わりについての多角的な理解を得ようとするものであった。辺縁部であるだけに社会・経済のプロセスや変化がよりたやすく確かめられるはずだという見通しに立って、まず地域全体のセトルメントパターンが追求された結果、大きなテルが形成されず、強力な都市センターを伴った都市国家へと組織されることがなかったというこの地域の特性が推測された。さらに、ひとつの大きな遺跡を中心据えて行われる従来の地域調査の戦略とは対照的に、時代の違ういくつかの鍵となる遺跡が選定されて、特定の課題を設定した発掘調査が一斉に行われた。すなわち、テル・ハダル、ロジェム・ヒリ、テル・ソレグなどの遺跡である。発掘調査には、アメリカ、フィンランドなど、各国の調査隊に参加が呼びかけられ、それを受け、文部省の科学研究費の採択を何度もかの申請でようやく受けた日本隊も、少し遅れてこのプロジェクトに参画することになったとい

うわけである。日本隊によるエン・ゲヴ遺跡の発掘調査が、聖書の記述に関するデータを集めることを目的とするという調査ではなく、前節でみた現代考古学の潮流の中で、新たな視角から、地域の環境と人間の営みを総合的に理解するという明確な目的と戦略をもった学際的、国際的なプロジェクトの一角を担う形でスタートしたものであったことをここでもう一度確認しておきたい。

このほか、エン・ゲヴ遺跡の発掘調査が中断していた1994~97年に、筆者を含む天理大学のグループが私学振興財団の助成を得て、「イスラエル初期鉄器時代の宗教考古学研究」と題したプロジェクトを独自におこなっている。旧約聖書の記述やウガリト文書、クンティレッド・アジュルドの土器片に描かれた「ヤハウエと彼のアシェラ」という表現などが示しているように、カナーン人と初期イスラエル人の信仰をめぐっては複雑な様相が想定され、多くの議論がある (月本 1993; カーターほか 1993; Hardley 2000.)。このプロジェクトは、イスラエル国内外の各博物館や大学を訪問して、考古学的な観点から、青銅器時代の女性裸身像を写したブラーク (いわゆるアシュタルテ) や鉄器時代の柱状土偶といった信仰にまつわる資料の情報収集をおこない、神殿遺構の発見されているイスラエル国内の遺跡を歴訪して、その理解を深めることを目的とするものであった (山内編 1998; 山内・金閥 1998)。

イスラエル考古学へのアクセス

最後に、イスラエルの考古学や遺跡の現状とアクセスの方法について簡単に触れておきたい。イスラエルという国が考古学が非常に盛んな国であり、遺跡が大切に保護・管理され活用されていることは、考古学関係者のみならず広く一般に知られている。イスラエル国内の古代遺跡に関する事項は、政府内に置かれた考古局の所管であり、重要な遺跡は国営公園として修復・公開されて、重要な観光資源になっている。より本格的には公用語のヘブライ語の能力が必要であるが、各所で英語が広く用いられ、英語を通してイスラエル考古学に一定の接近をすることが十分可能である。ともすれば危険なイメージがつきまとう国ではあるが、異様に厳しい出国時のセキュリティチェックを別にすれば、施設や交通手段の整った旅行者にとって不自由のない観光国である。

たとえば、インターネットでイスラエルをキーワードにして検索を行うと、考古学関係の情報をたやすく見つけることができるだろう。イスラエル政府観光局公認のホームページ (<http://www.israel.co.jp/israel>) から出発して、イスラエル考古局 (<http://www.israntique.org.il>)、ヘブライ大学 (<http://www.hum.huji.ac.il/archaeology>)、イスラエル調査協会 (<http://www.hum.huji.ac.il/ies/>)、聖

書考古学協会 (<http://www.bib-arch.org>) … というようにネットサーフィンをしてゆけば、どこでどのようなプロジェクトが進行してどのような成果があがっているかといった情報に加えて、来シーズンに行われる発掘調査のボランティア募集情報 (<http://www.mfa.gov.il/mfa/go.asp?MFAH00w0>) なども英語で調べることが簡単にできる。

現在のイスラエルの発掘調査は、考古局のライセンスを得て行うが、多くが一般のボランティア参加型のプロジェクトの形をとっている。発掘調査の現場では教育的な効果が期待され、明確な目的をもったプログラムが組まれている。

より専門的な内容についても、英語の概説書や事典などを通して接近することができるが、日本語では、小川英雄氏による一連の著作が非常に重要であり、また、テル・アビブ大学で考古学を修めた牧野久実氏が留学時代の体験を踏まえて、連載記事の形で、イスラエル考古学をめぐる近年の動向や事情・体験などについてのわかりやすい紹介をおこなっている(牧野 1994~)。イスラエルの遺跡を訪ねる旅行なら、関谷忠夫氏による入門書が遺跡や考古学についての理解を深めるガイドブックとして必携である(関谷 1996)。

引用・参考文献

- Albright, W. F. 1963 *The Archaeology of Palestine*. London, Penguin.
- Amiran, R. 1969 *Ancient Pottery of the Holy Land*. Jerusalem, Masada Press.
- Ben-Tor, A. (ed.) 1992 *The Archaeology of Ancient Israel*. New Haven and London, Yale University Press.
- Biran, A. and J. Aviram (eds.) 1993, *Biblical Archaeology Today 1990, Proceedings of the Second International Congress on Biblical Archaeology, Jerusalem June 1990*. Jerusalem, Israel Exploration Society and the Israel Academy of Sciences and Humanities.
- Dever, W. G. 1985 The Impact of the "New Archaeology" on Syro-Palestinian Archaeology. *Bulletin of the American School of Oriental Research* 242: 15-29.
- Dever, W. G. 1992 Syro-Palestinian and Biblical Archaeology. In D. L. Freedman (ed.), *The Anchor Bible Dictionary*, vol 1, 354-67. New York, Doubleday.
- Dever, W. G. 1993 Biblical Archaeology: Death and Rebirth. In Biran and Aviram 1993, 706-722.
- Elon, A. 1997 Politics and Archaeology. In Silberman and Small 1997, 34-47.
- Finkelstein, I. 1988 *The Archaeology of the Israelite Settlement*. Jerusalem, Israel Exploration Society.
- Hardley, J. M. 2000 *The Cult of Asherah in Ancient Israel and Judah: Evidence for a Hebrew Goddess*. University of Cambridge Oriental Publications 57. Cambridge, Cambridge University Press.
- Harris, R. L. 1995 *Exploring the World of the Bible Lands*. London, Thames and Hudson.
- Hino, H. (ed.) 1994 *En Gev Excavation by the Japanese Archaeological Project in the Biblical Land*. Tenri, University of Tenri (日野 宏編 1994 『高原と湖の遺跡—古代エン・ゲヴの発掘調査—』天理大学).
- Kempinski, A. and R. Reich (ed.) 1993 *The Architecture of Ancient Israel from the Prehistoric to the Persian Period*. Jerusalem, Israel Exploration Society.
- Kochavi, M. 1993 The Land of Geshur Regional Project: Attempting a New Approach in Biblical Archaeology. In Biran and Aviram 1993, 725-737.
- Levy, T. E. (ed.) 1998 (1995) *The Archaeology of Society in the Holy Land*. London and Washington, Leicester University Press.
- Mazar, A. 1990 *Archaeology of the Land of the Bible 10,000-586 BCE* (English edition). New York, Doubleday.
- Ohata, K. 1964-66 *Tel Zeror I~III* (English and Japanese editions). Tokyo, The society for Near Eastern Studies in Japan.
- Silberman, N. and D. Small (eds.) 1997 *The Archaeology of Israel: Constructing the Past, Interpreting the Present*. Journal for study of the Old Testament Supplement Series 237. Sheffield, Sheffield academic Press.
- Stern, E. (ed.) 1993 *The New Encyclopedia of Archaeological Excavations in the Holy Land*. Jerusalem, Israel Exploration Society and Carta.
- Sugimoto, T. 1999 Iron Age Potteries from Tel En-Gev, Israel: Seasons 1990-1992. *Orient* 34: 1-21.
- Syabit, Y. 1997 Archaeology, Political Culture, and Culture in Israel. In Silberman and Small 1997, 48-61.
- Trigger, B.G. 1989 *A History of Archaeological Thought*. Cambridge, Cambridge University Press.
- 小川英雄 1980 『聖書の歴史を掘る—パレスティナ考古学入門』東京新聞社。
- 小川英雄 1989 『イスラエル考古学研究』山本書店。
- 小川英雄 1992 『聖書考古学発掘調査団の活動について』『ユダヤ・イスラエル研究』13号 38-42頁。
- 小川英雄 1993 『エン・ゲヴ遺跡の発掘』『月刊イスラエル』(ISRAEL MONTHLY) 93.7号 7-10頁 日本イスラエル親善協会。
- 小川英雄 1998 『エン・ゲヴ出土の列柱付き建造物について』『オリエント』41巻1号 48-64頁。
- 小川英雄・山本由美子 1997 『世界の歴史4 オリエント世界の発展』中央公論社。
- 置田雅昭・日野 宏 1998 『イスラエル エン・ゲヴ遺跡』『考古学研究』45巻3号 95-99頁。
- オルブライト, W. F. (十時英二・戸村政博訳) 1986 『パレスティナの考古学』日本基督教団出版局。
- カーターJr., P. K. ほか (池田 裕・有馬七郎訳) 1993 『最新・古代イスラエル史』ミルトス (Shanks, H. (ed.) 1988 *Ancient Israel: A Short History from Abraham to the Roman Destruction of the Temple*. Biblical Archaeological Society)。
- 金闇 恕 1985 『世界の考古学と日本の考古学』『岩波講座日本考古学1 研究の方法』301-343頁 岩波書店。
- 金闇 恕 1987 『遺物の考古学、遺跡の考古学』『古事』1号 54-65頁 天理大学考古学研究室紀要。
- 金闇 恕 1990 『旧約聖書時代のエン・ゲヴ遺跡』『文明発祥の地か

- らのメッセージ』(第4回「大学と科学」公開シンポジウム予稿集) 84-91頁 クバプロ。
- 金関 恕 1997 「日本オリエント学会西アジア文化遺跡発掘調査団：旧約聖書の世界」「海外発掘展 日本隊による海外調査の歩み」25-29頁 古代オリエント博物館。
- 金関 恕 1999 「考古学は謎解きだ」東京新聞出版局。
- 関谷定夫 1996 「考古学でたどる旧約聖書の世界」丸善ブックス。
- 田中 琢 1993 「考古学の戦争」「文化財保護の思想」田中 琢・佐原 真著『考古学の散歩道』182-189, 190-203頁 岩波新書。
- 月本昭男 1993 「古代イスラエル唯一神教の成立とその特質」竹内 整一・月本昭男編『宗教と寛容－異宗教・異文化間の対話に向けて－』147-171頁 大明堂。
- 牧野久実 1994 「イスラエル考古学事情」「月刊文化財発掘出土情報 増刊号—最新海外考古学事情—」134号 90-97頁。
- 牧野久実 1994～ 「イスラエル考古学体験記」(連載)『みるとす』No. 4～。
- 牧野久実 1995 「ヘレニズム時代のエン・ゲヴとその周辺一人の營みと湖」『史学』65巻1・2号 109-124頁。
- 牧野久実 1997 「ペルシア時代のエン・ゲヴ」『史学』66巻2号 153-168頁。
- ヤディン, Y. (石川耕一郎訳) 1986 『ハツォール』山本書店。
- 山内紀嗣編 1998 『神殿と神像－古代パレスチナの信仰－』天理大学考古学研究室。
- 山内紀嗣 2000 「イスラエル エン・ゲヴ遺跡の発掘調査」網干善教編『世界の考古学』176-201頁 関西大学出版部。
- 山内紀嗣・金関 恕 1998 「パレスチナ古代神殿のはじまり」広瀬 和雄編著『都市と神殿の誕生』97-110頁 新人物往来社。

桑原久男
天理大学文学部
Hisao KUWABARA
Tenri University